

内容紹介

震災から2度目の正月を前に、被災地の暮らしはまだ中ぶらりのままだ。福島第一原発の近くに本社と工場があった餅専門店は、新工場を造るめどがまだ立っていない。使えなくなった田畑に太陽光パネルを設置する試みもまだ期待半分、不安半分だ。先の見定められない不安のなか、仮設住宅での暮らしが続く。

初出

朝日新聞 二〇一二年十二月二十六日～十二月三十一日

目 次

- [第1章 個人貯金で資金繰り](#)
- [第2章 使えぬ田畑で発電を](#)
- [第3章 火桶くてカップめん](#)
- [第4章 測定値が示す現実](#)
- [第5章 魂さえ家に帰れない](#)
- [第6章 「仮設では死ねない」](#)

第1章 個人貯金で資金繰り

年の瀬が迫り、福島県南相馬市の木幡喜久雄（こわたきくお）（64）は超多忙な日々を送っている。中でも金繰りには頭が痛む。「28日までに賠償金の一部が入るかどうか。入らなかったら、他から金を調達しないとイケません」

木幡は福島、宮城で9店舗を展開する餅専門店「木乃幡（このはた）」の創業社長だ。地元の「凍（し）み餅」をドーナツ風にした「凍天（しみてん）」が人気で、年間売上額は3億6千万円に達していた。

本社と工場は福島第一原発から19キロの場所にあった。警戒区域内だったため、立ち入りも不可。従業員の解雇を防ごうと、凍み餅を九州で作ってもらって営業再開したものの毎月赤字が続く。頼みの綱は東京電力の賠償金だが、いまだに入らない。

「東電は『賠償根拠を証明しろ』の一点張りです。被害者のこっちが証明しなければならない。しかも説明しても納得をしてくれません」

銀行に融資を頼むには2011年度の決算が要る。しかし……。

「6月には決算ができてなきゃいけないんですが、私が宮城に、事務員が山形に避難していてなかなか進まないんです。週3回、福島に出てきてやってるんですが」

事故前、たまたま銀行から運転資金2千万円を借りていた。事故後、新工場の用地購入に1億円借り、うち3千万円を運転資金とした。それでも足らず、今は自身の貯金をつぎ込んでいる。その額、3千万円。

震災時、木幡は本社にいた。外に飛び出ると目の前の自宅がすさまじく上下していた。だが本当の恐ろしさはそれからだった。市の沿岸に巨大津波が襲いかかった。高校の卒業式を終えた娘と車で走っていた従妹（いこ）が、娘と一緒に亡くなった。浪江町の消防団員だった長女の夫も亡くなった。「親戚が23人死にました。ずいぶん亡くなりました」。津波が去ったと思ったら放射能がきた。

新工場は宮城県内に造ることにした。食品をつくる以上、南相馬では難しいと判断した。「安全な品をつくっただけではだめなんです。お客さんに安心して買ってもらうには南相馬の名は当分外すしかない、と」

南相馬は先祖代々の地。いつかは帰ろうと思うが、いつになるかは全く分からない。賠償金が入らないと新工場を建設する資金もない。

中ぶらりんのまま、震災から2度目の正月が来る。

第2章 使えぬ田畑で発電を

「木乃幡」の木幡喜久雄がほっと落ち着く場所がある。福島市野田町の喫茶「桎久里（あぐり）」。原発事故前は飯舘村にあったが、全村避難で村を出た。今は仮店舗での営業を続ける。

経営者の市沢秀耕（いちさわしゅうこう）（58）と木幡は昔からの知り合いだ。たびたび酒を酌み交わして経営を語り合った。

2012年12月4日、市沢はあることを決めた。飯舘の自宅近くに10キロワット分の太陽光パネルを設置する決断だった。20×5メートルほどの木の土台に太陽光パネルを張り、できた電気を売る。仲のいい家族と岐阜県まで行って視察し、導入を決めた。

かかる費用は800万円。月2万7千円の収益が上がる計算だが、あくまで推測に過ぎない。

「試験です。可能性を探りたいんです。誰かがやってみないと成功するかどうかわかりませんから」

農家に生まれ、家を継ぐため福島市の農業高校から島根大農学部に進んだ。静岡の会社に就職したが、数カ月後に「祖父危篤」の電報。慌てて戻ると、翌日が村職員の試験日だった。だまされたと分かった。

役場に入り、農家も継いだ。20年前に役場をやめ、県職員だった妻の美由紀（54）と自宅前で「桎久里」を始めた。こんな場所でコーヒー専門店なんて絶対無理。無謀。多くの人にそういわれたが、成功する。

農業との兼ね合いは大変だった。周りで田植えが進むのを見て焦り、稲刈りが遅れて焦った。やがて田を貸し、畑には6年前からブルーベリーを植えた。苦労を重ねて1200本まで増やし、喫茶にジャム工房を併設。さあこれから本格収穫を、という矢先に原発事故が起きた。

福島市に身を落ち着けたあと、考えたのは田畑のことだった。

「われわれにとって、土地は預かり物なんです。先代から預かり、次の世代に渡す。だからもうからなくても農業するわけですよ」

長男に渡す土地が荒れ果ててはいけない。ならばどうするか。

水田と畑で3・7ヘクタールほど。考えた末、行き着いたのが太陽光発電だった。これなら放射能は関係ない。

「将来、都市の人からお金を募って農地に太陽光パネルを敷きつめることも可能ではないか、と。そのための実験です。何かをやっていないと飯舘はだめだと思うんです」

実験地は「桎久里」裏の原野にした。農地では国の規制がかかる可能性があると考えた。

設置は雪解け後。期待半分、不安半分で年を越す。

第3章 火怖くてカップめん

「榎久里（あぐり）」の市沢秀耕が飯舘村の職員だった26年前、市沢が事務局を務める緩やかな会ができた。名称は「いいたて夢想（むそう）塾」。現村長の菅野典雄を初代塾長に、若者たちが地域への夢を語り合った。

会員だった一人に福島市松川町の仮設住宅にある直売所「なごみ」のスタッフ、熊谷清（くまがいきよし）（59）がいる。1月に開店し、まもなく1年。年の瀬が迫るとともに忙しさも増す。

「ここからお歳暮を出す人がけっこうおりまして。お歳暮といっても上司とかじゃなく親戚や友人に出すんです。野菜や漬物が多いです。飯館の人がつくったものです」

飯館から避難した人の一部は福島市内や山形県内に土地を借りて白菜や大根をつくっている。それを「なごみ」が売り、仮設住宅の被災者が買う。ここの仮設にいるのは飯館の人たちなので、よく売れる。

熊谷は長距離トラックの運転手だった。村議会議員も3期務めた。原発事故が起こるまでは村内の直販所で責任者をやっていた。

「なごみ」がオープンした当初、熊谷は驚いた。仮設のお年寄りがまず買い求めたのがカップめんだったからだ。避難後、食生活は大きく変化していた。

「火を使うことを極端に恐れているんです。火を出したらよその家まで焼いてしまう。迷惑をかけたら大変だ、と。カップめんなら電気ポットで作れますから」

飯館は一軒一軒が離れていた。仮設は長屋だし、台所は狭い。「台所を物置にしている人もいます」缶詰やレトルト品もよく売れる。それで食事は楽しいのだろうか。せめて温かい総菜を出したい。しかし規制が厳しく、仮設の店舗では調理ができない。非常時なのに、なぜしゃくし定規なのかと熊谷は憤る。

「本当はみんなが集える食堂がほしいんです。お総菜を作り、その食堂でバイキングの夕食を出す。楽しいじゃないですか。食事って、ストレス解消になるんです」

いま熊谷が懸念しているのは仮設の中の孤立だ。外に出ない、誰とも話さないお年寄りが増えつつある。なんとかしなければ、と思う。

とはいえ熊谷には熊谷なりの心配もある。「なごみ」は行政の補助があつてこそやっていける。その補助は1年ごとに決まる。

2013年度の補助はまだ確定していない。お年寄りを心配し、「なごみ」の前途を心配し、熊谷の震災2年目が暮れる。

第4章 測定値が示す現実

福島県浪江町津島地区の菅野（かんの）みずえ（60）は2011年3月12日夕、白い防護服を着た2人の男から「頼む、逃げてくれ」といわれた。

あとき津島には、他地区から1万人近い人々が放射能から逃れてきていた。みずえの家にも23人がきた。その全員がその言葉でさらに遠くへ避難し、それ以上の被曝（ひばく）をせずにすんだ。

「防護服の男」がだれだったか。いまでも謎のままだ。

男の正体がだれであれ、そのおかげでみずえたちが助かったのは間違いない。

みずえは今、福島県桑折（こおり）町の仮設住宅に住む。プレハブ長屋の9坪の家に長男の純一（じゅんいち）（28）と暮らす。壁は薄く、食器を洗う音さえ隣の家を気遣う。

12年12月になって、みずえは自宅に一時帰宅し、庭で育てていたナメコとシイタケをとってみた。

二本松の浪江町役場に持って行って測定したら、ナメコの放射性セシウムは1キロあたり5万7300ベクレルあった。国の基準値の573倍。シイタケは362倍だった。

自宅の田畑はセイタカアワダチソウに占領されている。農地を枯らすので、農家にとっては天敵の野草だ。荒れ果てた田畑を見ると、すっかり力が抜けてしまう。

暮れの25日、町の住民説明会が福島市であった。そこで、みずえの家は「帰還困難区域」になることが示された。年間の被曝線量が50ミリシーベルトを超えるからだ。これで5年間は帰れなくなった。

しかし安全基準をはるかに超えて汚染されている作物の現実を知らされると、5年で本当に帰れるのかどうか不安になる。

「放射能に色でもあれば、あきらめがつくんだろうけれど……」

みずえが暮らす仮設住宅では412人の浪江町民が避難生活を送っている。みずえが知っているだけで、5、6人がここで亡くなった。お年寄りが目立つ。浪江にいたときは畑仕事に歩き回って元気だったのに、仮設暮らしで体調を崩した。

みずえは3月、部屋に閉じこもる高齢の女性たちを誘い、刺し子の布巾と台ふきをつくる仕事を始めた。

仮設のお年寄りたちはこういつて笑う。

「いろんなこと、早く決めてくれないと、オラ、先に死んじゃうよ」

こんな所でまた年を越さねばならないのか。笑いの中に、そんな本音が交じっている。

第5章 魂さえ家に帰れない

2012年4月。浪江町南津島にある真言宗長安寺の本堂には35人分の箱に入った遺骨が積まれていた。一帯の放射線量が高すぎて、墓に納骨できないのだ。

12月14日、寺の遺骨は57人分に増えていた。

57人目の遺骨は門馬勇夫（もんまいさお）だ。この1日に亡くなった。58歳、まだ死ぬような年ではなかった。

門馬は、菅野みずえの家に近い南津島に家がある。母と妻、長男、次男の家族5人で住んでいた。

11年4月、津島地区が計画的避難区域になった。しかし門馬はその後1人で家に残った。飼っていた犬を連れていけなかったからだ。5月下旬、町役場に無理をいって避難所に連れて行く許可をもらい、ようやく津島を出た。

仮設住宅に入ると生活のリズムが狂った。酒浸りになる。妻のまゆみ（48）は、「多いときは4リットルの焼酎のボトルを1日で2本も空けた」と明かす。アルコール依存症になり、顔は土色に変わった。

11月、息子がアルバイト先から帰ると、門馬がけいれんを起こしていた。すぐ病院に運ばれたが、3週間後に亡くなった。まゆみはいう。

「生まれ育った家に住めなくなったのがショックだったのでしょう。政府や東電にいつも怒っていました。帰れないなら帰れないとはっきりいつてほしい、と」

遺骨は12月14日、長安寺の本堂に置かれた。「やつと津島に戻れたね」。まゆみは遺影にそういった。

住職の横山周豊（よこやましゅうほう）（72）がお経を唱え、まゆみにいった。

「除染がすんで、放射能が低くなってから、ご納骨しましょう」

横山自身、福島市に避難中の身で寺には住めない。寺の放射線量は庭先で毎時6～7マイクロシーベルト。年間50ミリを超える。

「死んだ人も生きている人も家に帰れない。魂はさまよったままなのです」

横山は、遺骨を仮安置できる場所を福島市内で探し回っている。遺族が安心してお参りできる場所がほしい。それに遺骨とはいえ、放射線量の高いところにさらしておきたくない気持ちもある。

しかし遺骨を置くというだけでいやがられ、不動産屋に断られてしまう。被災した真言宗の19寺が集まり、東京電力と交渉を続けている。

原発事故の避難後に亡くなった町民は11月末時点で448人。町の全人口の2%に上る。

第6章 「仮設では死ねない」

浪江町屋曽根（ひるそね）の佐々木（ささき）ヤス子（こ）は、年を越せずにこの世を去った。84歳の誕生日の2日後だった。

自宅に住んでいたときは健康に気をつけていた。畑の野菜を食べ、素食を心がけていた。しかし2011年5月、ホテルに避難中に検査を受けたら血糖値が450に上がっていた。正常値の4倍以上もあった。

避難生活で栄養価の高い弁当ばかりを食べていたからだと思った。あわてて毎日散歩するようにしたら、なんとか正常値に戻った。

ホッとした11年9月、膵臓（すいぞう）ががんが見つかった。東電に相談したら「それは既往症ではないか」と返された。腹が立ったが、どうしようもない。12年の1月に会ったとき、ヤス子はひどく落ち込んでいた。

「くやしいよ。原発事故でろくに検診も受けることができなかった。事故がなければこんなことにならなかったのに」

5カ月後の6月22日、ヤス子は家族にみとられて息を引き取った。

10年ほど前、ヤス子は民話の語り部活動を始めていた。70歳をすぎたころだった。

自宅の畑の横に、1千万円をかけて資料館を建てた。そこに600点以上の古民具を展示した。古い農機具や食器などだ。子どもたちが見学にくると、ヤス子は喜んで民話を話して聞かせた。

そんな楽しい日常が、原発事故で唐突に終わりをつけた。

昨夏、一時帰宅した。資料館は瓦が半分ほど落ちていた。知り合いの大工に修理を頼んだが、放射線量が高いので断られた。しかたなく、展示品にシートをかけた。放射線量は毎時21マイクロシーベルトだった。

亡くなる前の1年、ヤス子は桑折町の仮設住宅でひとり暮らしをしていた。その家は今もヤス子の表札がかかったままだ。

遺骨は、次男の茂（しげる）（58）が二本松市の仮設住宅に置く。長安寺の檀徒（だんと）だが、寺には預けなかった。長安寺は放射能高汚染地域を隔てるバリケードの向こう側。そこに預けると、そうそう遺骨には会えなくなる。

がんが見つかった後、ヤス子は小さな本を作った。ときどきの随想をまとめて200部ほど印刷したものだ。そこにヤス子はこう書いた。

「この仮設住宅で死んでは駄目だ。私の人生の収束はここでは出来ないと強く思っている」

プロメテウスの罠〔22〕 中ぶらりんのまま、また年を越す

著 者 朝日新聞（依光隆明、前田基行）

発行所 朝日新聞社

〒104-8011 東京都中央区築地5-3-2

<http://www.asahi.com/>

発売所 朝日新聞社デジタル本部

〒104-8011 東京都中央区築地5-3-2

<http://www.asahi.com>

2013年4月25日 WEB新書版発行

2013年11月30日 EPUB版発行

©2013 The Asahi Shimbun Company

All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.

ISBN 978-4-86526-050-2

〈ご注意〉本コンテンツは、購入者個人の閲覧目的のためのものです。私的範囲を越える利用・譲渡などは禁止します。

〈おことわり〉本コンテンツは2013年4月25日に刊行されたWEB新書版を底本としました。EPUB版の刊行にともない、体裁や表記を直した場合があります。企業、組織などの名称、人物の役職、肩書等はいずれも記事初出当時のものです。